

# 人は何のために生きるのか

—放浪の果てにスイスで見つけた  
障害を持つ人たちの豊かな人生



松林 幸二郎

まっばやし・こうじろう

作業療法士、スイスの重度心身障害者施設「グロスファミリー」勤務

「人は何のために生きるのか」その答えを探しに世界に出た。たどり着いた先はスイスの障害者施設だった。そこで出会った障害者たちは、哀れな存在などではなく、日々神の愛を覚えてくれる存在だった。そして、そこに探し求めていた答えはあった。

納屋を改造した自宅のアトリエで版画を制作する松林さん。

「人は何のために生きるのか」を求めて、働きながら通った大学を卒業するやいなや日本という島国を飛び出し、五十数か国を放浪しました。気がついたときはイギリスの語学学校で知り合ったスイス人の妻と東スイスのアルプスの麓に居を定め、それから三人の娘を育てて二十五年の歳月が流れていました。

神も知らず信仰とは無縁で特殊な能力にも知恵にも欠く小さな私を日本から導き出し、私に信仰と必要な賜物を与え、それを生かせる重度心身障害者施設での作業療法室での仕事を与えてくださったのは、まさしく神のご計画であったと信じ、つつましくも自然環境に恵まれた場所にある古い農家で生活できる恵みを感じておりました。

## 市場原理の嵐の後で

変化は突然やってまいりました。新しい米国流の近代マネージメントを武器に入ってきた女性マネージャーが、施設の精神的バックボーンであったキリスト教を廃棄し、これまで金儲けと実業界を

支配していた市場原理主義を導入したのです。その結果、私たちが主よりいたたく愛をもつて慈しみ、お世話させていたたくべき障害者が、神から委託された、神のことも、という見方から、金と仕事を持ってくるキャピタル(資本)という見方になりました。

そのように施設が、顧客(クライアント)サービスを提供する福祉企業に変化していく中で、私が深く敬愛していたキリスト者の施設長を初めとして、マネージャーの意に添わぬキリスト者はか優秀な働き人は次々に追放されていきました。

やがて、私のアートを取り入れた作業療法も、鳥が羽をもちられるように次々と禁止事項が設けられ、実態なきものとなっていき、そんな中で働きを続けられていくという苦しみの四年が始まりました。

「主よ、主よ、この不義をいつまで許しておかれるのですか。時には、ダビデのように、あるときはヨブのように、「どうしてこのような状態が続くことをよしとされるのですか」という嘆きの祈りをぶつける日が続きました。

そんな苦しみの中に、主が私の

## 今年も価格を据え置きます!!

### みことばの光

#### 新規購読のチャンス!

2008年1月号から始めて5年間で聖書全巻を読みます

(今年で2年目に入りますが今から始めても大丈夫です)

毎日聖書を読むための  
最良の手引き書

### 月刊 みことばの光

- ・55年目の信頼と実績
- ・この機会にぜひ定期購読をお始めください。
- ・お知り合いの方にもお勧めください。

定価350円

・定期購読料・

(半年間) 2,100円  
(1年間) 4,200円

・若者向け、入門者向け、  
家庭礼拝用 (価格据え置き)

### 月刊 ジュニア みことばの光


「みことばの光」の通読箇所によって、5年間で聖書全巻を読むようになっています。併せてお買いください。

定価300円

・定期購読料・

(半年間) 1,800円  
(1年間) 3,600円

聖書同盟出版部に直接お申し込み下さるか、キリスト教書店でお求め下さい。

 聖書同盟

〒214-0013 川崎市多摩区登戸新町432-304  
TEL.044-900-9047 掛番00140-4-57061  
E-mail: seishodomei@nifty.com  
http://homepage3.nifty.com/su/

ため新しい職場を用意してください。ついでにことを知るのには、それから三年半後のことです。

二〇〇六年一月末に二十七年間勤務した施設を退職することになりました。有終の美を飾りたいと願っていましたが、体力気力が限界点にきていたのか、風邪も嫌って逃げてしまうほど健康だけがとりえの私が、職業のなかでついに体調を崩してしまいました。

リストラが続いていた施設で、私も二十五年ぶりに看護の仕事に戻されていましたが、新しい管理体制とともに導入された毎日異なる不規則な勤務形態に、生活リズムを壊されました。そのうえ、夜勤(十時間連続)もかなりきつく、若い看護人の間にも病欠が増えませんでした。二月に入ると、

後頭部をハンマーでなぐられたような激痛がたびたび走るようになり、職業のなかで身動きさえとれなくなりました。その症状から判断して、我々の世代に多くも腹下出血では、と一瞬死が頭をよぎりました。せめて、この夏の長女と次女の結婚式には出たかったのだ、と無念に思ったものでしたが、幸い大事には至りませんでした。極度のストレスによるパーンアウトのようなものだったと思います。職場を変った途端、症状

は消え、血圧、血糖値、脈拍など、すべて異常だったものが正常値に戻りました。

は消え、血圧、血糖値、脈拍など、すべて異常だったものが正常値に戻りました。

主が転職先として用意して下さった職場は、私の妻も数年前から週に一日働いていた、友人クリスチャンの夫婦が率いるクロスファミリー(Crossfamily)大家族と呼ばれる、七人の障害者と健常者がともに住む家族形態をとった施設でした。従来の施設に替わる形態として、東スイスに二十

主が用意して下さった職場は、クロスファミリーと呼ばれる、障害者と健常者がともに住む家族形態をとった施設でした。

六年前にできたものです。

「家族」ですから、いままでやっていた作業療法ほかに、看護や家事もこなさねばなりません。いや、看護や料理、掃除といった家事の比率のほうが高くなりました。東スイスには、このようなクロスファミリーと呼ばれる「家族」が十ほどあり、財政的にもスムーズな運営ができるよう、また情報を交換し、お互いを支援できるようにと、一つの福祉法人になっています。

そのクロスファミリーで、障害者が重くて外の作業所に行けないハンスさん(仮名)とアニタさん(仮名)のために、一階の物置になっていた作業場を建て、工房にすることを許されました。「ヤギ工房」と命名しました。大きな



クーゲルバーンを制作中のハンスさん。

時間的制約がありますが、そこは、主が私に与えた賜物を生かせる、主の備えてくださった場所だと思いい、感謝しております。

私が好きかい？

七、八年前までハンスさんの片方の目は、また二〇%弱の視力が残っていましたが、現在は全盲になっていきます。二十年ほど前からハンスさんには年に二、二度会っていましたが、また黒い髪の若い私のイメージが彼の脳裏には残っているものと想像されます。

私が「やぎ工房」を始めて以来、よほど気分が優れない限り、車い

すで働きに来ますが、それまでは全盲ゆえ、なすすべを知らず、一日中、塵芥を眺めている生活だったとのこと。

ハンスさんの仲間の六人のうち五人は、ハンディキャップを背負いながらも外の作業所、工場に毎日出て行きますから、ぼつねんと残されてしまう全盲の彼の寂しさはいかほどだったことでしょうか。

その彼が、クリスマス前に高さ一メートルのクーゲルバーン(＊)を一年かかって完成させました。何百個もの木片に、卓上ドリル機で三つ穴をあけ、サンドペーパーをかけ、木片を一つずつ中央の木棒に差し込んでいく、盲目の彼にとっては気の遠くなるような作業ですが、完成させたときの彼の得意満面の笑顔に、私の心はどれほど喜びに満ちたことでしょうか。重い障害のゆえ、何も作れぬがゆえ、片隅に追いやられていたハンスさんにスポットライトが当た

った瞬間で、ファミリー構成員の偽りのない称賛のことは、彼に自信と存在意義を与えてくれたに違いありません。

「Hascht mi gern?」「私が好きかい？」

ハンスさんが、見えない目で私の魂の奥をのぞき込むようにそつ尋ねる頻度は、勤務して三年近くたった今、さすがに減ってきました。しかし、それでも日に幾度かは、そう尋ねてくるのです。

ハンスさんは、まだ四十年代半ばですが、全く歯がありません。二十年前、グロスファミリーに来る前にいた施設で、あまりに自他傷癖がひどいので、全身麻酔をされて全ての歯を抜かれてしまったとのこと。視力のみならず、身体力行能力がほとんど後退している中で、ハンスさんは荒れに荒れていったのでしょうか。

彼の「私が好きかい？」という問いは、根元的な人の魂の渴望からくる問いではないかと思えます。

そして、その攻撃性と自他傷癖のゆえにのけものにされ、何十年

を孤独と苦しみの中に、そして今は暗やみに生きている彼にとって「うん、もちろん大好きだよ」ということはほど重く大切なものはないのです。

彼の「私が好きかい？」という問いは、根元的な人の魂の渴望からくる問いではないかと思えます。私たちは、ことばにはしなくとも、伴侶に、親に、子に、隣人に、同僚に、そして、だれよりも神に、絶えずそう問いかけている存在ではないでしょうか。

「もちろん、お前が大好きだよ」と、無言の返事を受けて、私たちはどんな状況の中においても、慰められ安心させられ今日を生き抜く力が与えられます。反面、その返事がなければ、精神のバランスを崩してしまい、さまざまに精神的・肉体的疾患に遭遇することになります。

私は、自分の気持ちや感謝の念、そして称賛をことばと態度で表現するに、あまりにも稚拙で鈍感な日本人男性の一人であったため、わが妻や子どもたちに、余計なコンプレックスや心の負担を与えてきたことを深く反省しています。

過去は取り返しのきかぬこと

\*Kugelbahn/Kugelは玉、bahnは通路・走路という意味。一種のしかけおもちゃで、さまざまな形状の物がスイスでは販売されている。ハンスさんの作ったクーゲルバーンは1メートルの高さの塔で、ビー玉を上から落とすと、音を立ててさまざまな通路を通り玉が下に落ちていくしかけになっていて、子どもにも大人にも人気が高い物。



宍戸好子

# タベになっても光がある 「老い」について聖書から大きく

聖書は、齢を重ねる者への慰めと警告を豊かに与えてくれる。「老い」の視点から向き合った御言葉の黙想12篇。  
四八判上製・88頁・1470円

ニューセンチュリー聖書注解

## レビ記

P.J.パッド 訳  
山森みか 訳  
神による命令や、祭儀の規定が記されているレビ記。その一つ一つを、現代の私たちにわかりやすく解説する。



A5判 上製  
474頁・8,190円

シリーズ既刊 好評発売中

- 「ガラテヤの信徒への手紙」  
ドナルド・ガスリ 新免 貴=訳 3,780円
- 「ローマの信徒への手紙」  
マシュー・ブラック 太田 博司=訳 4,515円
- 「歴代誌上・下」  
H.G.M.ウィリアムソン 杉本 智俊=訳 9,240円
- 「使徒言行録」  
W.ニール 宮本あかり=訳 6,090円

日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457  
E-mail eigyoku@bp.uccj.or.jp (価格税込)  
<http://www.bp.uccj.or.jp>

で、悔いは消え去ることはないでしょうが、主に救っていたために、今後は、感謝と心から人を褒めることばは、回りにいる人たちに積極的にかけていきたいと願っています。

“Ja, I ha di gern”「もちろん、喜びが大好きだよ」

この、シンプルなことばは、なにも障害を持ったハンズさんにも必要なことばでなく、競争社会にあつて孤独といわれる現代人すべてが心から欲していることばでしょう。

そして、こんなに小さく弱い罪ある存在である私も、日常生活のなかで、神からの“Ja, I ha di gern”のことばを聴くことによって勇気と安心を得て、大きなよろ

こびをもって主の道具として働くことができていることです。

ハンズさんはクレーゲルバーンを完成させた翌日に家庭医のドクター・ミューラーの検診を受けて、痛い検査もあつたろうに満面の笑みを浮かべて帰宅しました。手にはドクターからのプレゼントで、彼の大好きなミニカー。

「これ、ドクターがくれたんだよ。いっぱい話しかけてくれたんだよ。人生って喜ばだよね！」



大がかりなタペストリーの制作も、アートを取り入れた作業療法の一つ。

“I ha Freu am Laebel”「僕の人生には喜びが一杯だよ」と、機度もうなずくハンズさん。

私たちが、ハンズさんのように

“I ha Freu am Laebel”と、人生に大きな喜びを感じるには、どれほどのお金と地位と住まいと物質と、人からの称賛があることだろうか。日々、感動することが乏しく、ささやかな親切や愛を素直に喜べないために……。

「やぎ工房」には、もう一人障害が重くて外に働きに出られないアニタさんがいます。

グロスファアミリーに住みながら、十年間、私が以前勤務した施設の作業療法室に火曜と水曜、実際に生き生きと「仕事」に通つて来ていました。が、前述した施設のリストラで突然来られなくなりました。五年前に母親を、二年前に父親を亡くして悲嘆にくれ、親代わりになつていられる姉も乳がんで病身



お孫さんを抱いて、3人のお嬢さんと。左端が妻のハイディさん。

となつてゐるのに、生きがいでもあった「仕事」に明日から来るなという宣告は、どれほどむごい仕打ちだったことでしょう。

それは、彼女にとって到底理解することのできない晴天の霹靂で、「いつ、また働きに行けるのか？」と、問う毎日であつたとのことでした。成果主義もグローバルゼーションも、人の幸せや人生を破壊すること、無抵抗な障害者や弱者を切り捨てることに全く

無頓着で情け容赦がありません。

アニタさんの住むグロスファミリで私が働くことになり、作業室を改造して、再び大好きな刺しゅう、紙すき、工芸を始めたときの彼女の喜びは計りしれず、この転職が、主が私を導いてくださったものに間違ひなかつたことを私に知らしめてくれました。

### 障害を持つ人たちが救えてくれたこと

日々、障害者に接して生きてきて確信を与えられたのは、主が、いわゆる障害を持つ人を深く愛されてゐるということです。

障害を持った人が生活を保つには、当然助け手が必要で、それは、神がその御業を現すのに、私たち人間を必要としている関係に似ています。世間では、障害を持つ人は、同情すべき、哀れむべき、時としては劣った存在として見られます。しかし、障害者が施設で働いたこの三十年間、どれほどたくさんのお孫さんを抱いて、3人のお嬢さんと。左端が妻のハイディさん。

例えば、「体面」「体裁」「へつ

らい」といった、いわゆる健常者には当然の心を縛る枷は、一般に知恵遅れといわれる人たちにはなく、喜びも、人の好き嫌いもストリートに表現してきます。

私たち、いわゆる健常者は、彼らからどれほどたくさんのお金を稼ぐことを教えられているか、量り知れません。アニタさんのような心は永久に持てないかも知れませんが、この年まで生かされていることの意義を大切に、感謝し、少しでもアニタさんから学びたいと願っています。

「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです」マタイ五・四〇

イエスさまはその生涯において、病いを持つ人、障害を持つ人、絶望的な立場にいる人に、好んで近づき憐れみと愛を注がれました。

体面、体裁、へつらいと私たちの心を縛る枷は、一般に知恵遅れといわれる人たちにはなく、喜びも人の好き嫌いもストリートに表現してきます。

た。

妻とともに同じ職場で、ともに働き、障害を持つ人々に仕えることが、同時に、主に仕えることとなる幸いを、主から与えられた深い恵みと感謝して、イエスさまに似た者とさせていたがために、祈り続けたいと思っております。



グロスファミリーでの楽しい回りのひととき。